

耳鳴りがして、頭の右半分が疼く。腹這いになって、頰杖をつき、朝の煙草を喫い、左手の調子をみる。傷跡は残っているが、もう動きには不自由を感じない。回復は、思ったよりも早く、左手の役割りは十分に果たせるまでになっている。

空虚な朝だ。思考の糸がぶつぶつ切れる。半分は耳鳴りのせいだ。全身の統一感というものが無い。肉体も日に日に衰弱していく。壊れかけている証拠だ。感情に昂揚というものが無い。心の空虚がそのまま部屋の気配にも泌みついている。がらんとした、本当に、平凡な部屋だ。しかし、眠るためには、それで充分だ。

X氏は、冷蔵庫からサンドイッチをとりだして、コカ・コーラで流し込むようにして食べた。10時だった。作業を開始する時間だ。一週間の新聞をとりだし、赤鉛筆で、殺人に関する記事に印をつけ、缺で切りぬぎ、真っ白いノオトに貼りつける。X氏の趣味だった。人間は、何もしないではいられない。何もしないということを続けていると、自分を食い殺してしまうことになる。それは、以前の経験で実証済みだ。ノオトの余白に、2〜3行、思いついたことを断片的に書き込んでおく。もう10年になる。X氏のノオトは、殺人者たちの声でうまっている。殺人の意味を追求してゐるのではない。犯人に興味があるという訳でもない。その理由も原因も考えない。罪や罰にも関心はない。殺人は、たったひとりで行う戦争だ。その一点がX氏を刺す。殺人の形を見る。殺人者の放った声と行為。殺人も、また、人間のうみだす知のひとつだ。人間がもつとも強烈に顕現す

る。だから、善とか悪というものは、はいり込むスキがない。

殺す、消えてもらう、終りにしてしまう、壊すのだ、しかも、狂気ではなく、あくまで醒めたままで、正確に、素速く、頭のなかを走る線にそって、鋭く、尖った行為が形式としてあらわれる、それが殺人という知だ。もちろん、誰もがもっている能力だ。使用するかしないかは、半歩の差だ。踏みだしてしまつた者と、踏みとどまっている者、せいぜいそのくらいの区別しかつかない。

X氏は、殺人の形式に関して、シュミレーションを行なつてみる。情報は、すべて、新聞記事による、詳しい記録や犯人の告白の声は知らない。記事の文章で充分だ。殺人の形式は、簡単に、明確だ。

雨が降りはじめから、殺人の件数が増えている。切り貼りの余白には、必ず、曜日、天気を記入する。自殺は、殺人よりも多いが、X氏は、自殺を殺人とは認めないので無視している。自分で自分を殺す行為は、まったく殺人とは関係がない。

殺人の形式も、マラソンの瀬古選手と中山選手のフォームがちがうように、必ず、ある固有のものをもってしまふ。不思議だ。殺人という行為のせいだろうか、殺人者には、実に、平凡な人が多いのに、その行為には、その人に固有の何かがあらわれてしまふ。

空気がうすい、自分のがらんだらうだ、私はもうひとりの自分の声で殺つたという声に出会うと、X氏は自分に似ているなと思う。そのような声は、平凡に働いている人の声に近いものだ。